6. 骨シンチグラフィで認められた比較的稀な部位に骨転移をきたした症例について

上妻　隆昌　吉居　俊朗　高橋　一之
平山　貴紳　森田誠一郎　大竹　久
（久留米大・放）

今回われわれは悪性腫瘍における骨シンチグラフィで比較的稀な部位に骨転移をきたした症例を経験したので報告する．

症例は5例で，内訳は肺癌2例，肝癌2例，食道癌1例である．

一般に骨転移部位の多くは赤色髄の部位であり，脊柱，骨盤，肋骨，四肢では上腕骨，大腿骨などであるが，われわれの経験した骨転移例は肺癌では下顎骨および脛骨であり，肝癌2例では肩甲骨であった．また，食道癌では膝蓋骨であった．全国骨腫瘍登録例 8,570 例 (1964～1982) では，下顎骨 (0.6%)，脛骨 (1.1%)，肩甲骨 (2.1%)，膝蓋骨 (0.9%) となっている．5症例を呈示する．

7. 胸肋鎖骨異常骨化症の骨シンチグラフィ

坂田　博道　宮内　貞一　小野　庸
（福岡大・放）

胸肋鎖骨異常骨化症は胸骨，鎖骨，肋骨などに異常骨化を呈する疾患で，しばしば掌蹠膿疱症 (PPP) を合併する．しかし胸肋鎖骨異常骨化症の骨シンチグラフィに関する報告は少ない．今回われわれは上記疾患について骨シンチを実施し，X線所見や臨床症状と比較検討したので報告した．対象は胸肋鎖骨異常骨化症が疑われた37例で，そのうち PPP 合併例は 29 例 (78%) である．骨シンチでは 37 例中 32 例 (86%) に異常集積がみられ，前胸部痛，肩痛，腫脹などの臨床症状がみられたものは26例 (70%) であった．一方 X 線検査で異常骨化がみられたのは 33 例中16例 (48%) にすぎなかった．さらに骨シンチでは 37 例中 10 例 (14部位) に腰椎，大腿骨，仙腸関節などの他の部位にも異常集積が認められた．骨シンチは胸肋鎖骨異常骨化症の診断に有用であると思われた．

8. FCR を用いた骨シンチと骨 X 線画像との重複画像の検討

阿辺山和浩　池田　耕治　島袋　国定
米倉　隆治　篠原　慎治　（鹿児島大・放）
中村　純雄　小林　保浩　松本　俊也
禧久　豊嗣　（同・放部）

骨病変の範囲を正確に知ることは治療方針の決定に際し重要なことと考えられる．

一般的に骨病変の早期検出，正確な病変範囲の把握に骨シンチグラフィは骨 X 線検査より優れているといわれている．しかし，解剖学的範囲をより正確に知るには X 線画像への詳細な feedback が必須と考えられる．そこでわれわれは FCR を用いて RI 画像と X 線画像とを重複させた画像を作成し，検討を加えてみた．その結果，重複画像は得られたものの，通常のシンチグラフィで表示された異常集積範囲より小さく，現状では臨床的に応用するには不十分なようであるが，1つの方法論として報告したい．

9. 心筋炎の心プールシンチグラフィ

花塚　秀樹　桂木　誠　工藤　祥
岸川　高　（佐賀医大・放）
江口　秀樹　松尾　修三　（同・循内）

心筋炎は，最近ではウイルスによるものが多く，風邪症状に引き続いて発症することが多いと考えられている．様々な程度の心機能障害をひきおこすが，これを心プールシンチグラフィにて検討した報告は，ほとんどなされていない．今回，臨床的に心筋炎と診断された7例に施行した心プールシンチグラフィを対象に検討した．検査は体内にて標識した ^{99m}Tc-赤血球 20 mCi を用いて行い，心電図同期下に初回循環および平衡時のデータを収集し，左室壁運動，肺通過時間，容積曲線の観察を行った．データ処理は島津シンチパック 2400 で行った．今回の心筋炎7例では，5例で壁運動が低下し，2例で肺循環の遅延が認められた．また，容積曲線にて収縮期指標の低下が認められた．

Presented by Medical*Online